

日本語の豊かさと英語の関係

阿部公彦

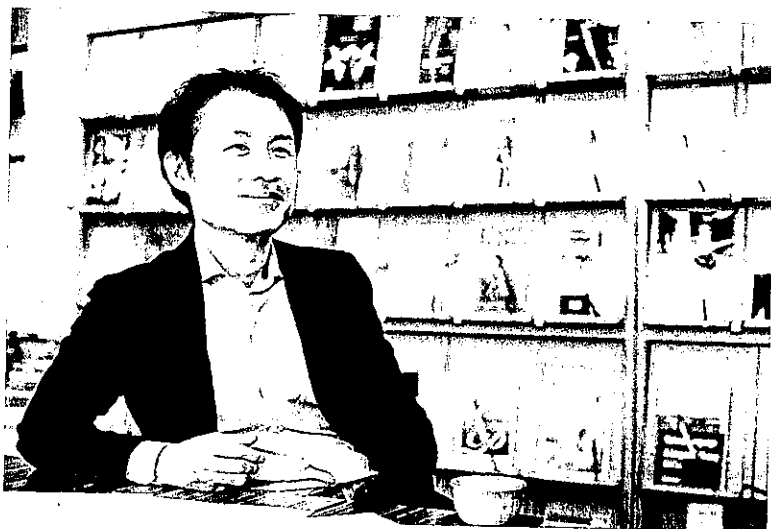
(英文学者・東京大学大学院教授)

わたしたち日本人は普段、日本語で会話しています。「英語は難しい」「勉強しても、なかなか英語を使えるようにならない」。そういった声をよく聞きますが、まずは自分たちの言語である日本語がどのような特性を持つものか、また日本語によるコミュニケーションは英語のそれと比べて何が違うのかを考えてみる必要があるでしょう。

日本での生活は、日本語だけで事足りる。こう言うと、多くの人が「当たり前じゃないか」と反応するかもしれませんが、世界的に見れば、そういった言語はむしろ希少な存在と言えます。明治維新の際に、日本は欧米から新たな文化、また国家運営のための統治システムを導入し、そこで必要となる概念などを意味する単語を作り出して日本語に加えていきました。つまり、欧米の思想や哲学も日本語だけで表現することが可能になった。この点が、世界的に見ると偉業と言ってもいいほど特異な例なのです。

日本語の豊かさと外国語の関係

幕末の開国から明治期の日本と同じように、それまでは自国に存在していなかった欧米の思



想・哲学に期せずして触れることとなったアジアの他の国々では、そういった外国文化を逐一、自国語に翻訳する作業が行われませんでした。そのため、現在も大学あるいは大学院レベルの授業は自国語で行うことができず、英語をつ

かっている国が少なくありません。

さらに驚くべきは、中華人民共和国という国名のなかで純粋な中国語は「中華」だけで、あの「人民」「共和国」はいずれも明治維新以降に日本で作られた単語を輸入して、中国語に加えたもの。また現代の中国でつかわれている言葉のうち、特に社会科学関連のものは六割以上が日本からの輸入だとする統計があるようです。このように、漢字の原産国である中国に対しても、それらを組み合わせた単語を次々と輸出するほど、日本語というのは豊かな言語なのです。だから、日本で生活しているかぎり、日本語だけで事足りてしまう。

英語を話せるようになりたいという方に「では、家庭の公用語を英語にしてみてください」と言うのが当然、多くの人はまず恥ずかしがりません。そして実際にトライしてみても、日常的に

家族間で交わされている会話でさえも英語にできなかつたりします。でも、そういった際にぜひ「何が、わからないのか」と、できない理由を考えてみてください。

そうすると、わからないのは多くの場合、単語であったり、慣用的な言い回しであることが判明するはずですが、逆に言えば、それらの単語や言い回しを覚えれば、英語で表現できるようになるということ。ただ、そこで今度は日本語の問題も浮上するはずですが、

たとえば、お父さんがお母さんに「お茶を淹れてくれ」と頼む場合、「おーい」だけで事足りているケースも少なくないはずですが、日本語という、外国の文化もすべて表現できるほど豊かな言語を持つという点で、日本には「以心伝心」の文化が深く根づいている。

まずは、英語が日本語とはまったく異なる、生

き物であることを、しっかりと認識することが必要です。

翻訳には必ず「欠落」が伴うもの？

この違いについて、さらに踏み込んでみましょう。二〇一八年に神戸女学院大学で「日本人は英語がしゃべれない」問題について英文学の見地からいろいろ考えてみる」と題した講演を行いました。そこで英文を日本語に翻訳した際にどのような「欠落」が起きるかを検証してみました。

他人の日本語訳にケチをつけるのは心苦しかったので、自分が翻訳した『フランク・オコナー短編集』(岩波文庫)から、いくつかの小説を取り上げました。

『マイケルの妻』という短編の書き出しとなる段落に、次のような一文があります。

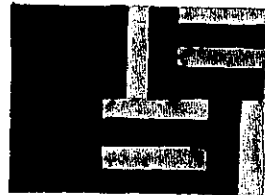
From far away along the water's edge came the shrill whistle of the train before it puffed into view with its leisure air that suggested a trot.

外国の文化もすべて表現できるほど豊かな言語を持つという点で、日本には「以心伝心」の文化が深く根づいている。

英語と日本語が異なる「生き物」だ
 ということを無視して日本人が英語を喋ろうとしても
 難しいのは当たり前です。

これを、わたしは次のように翻訳しました。
 遠くから水際に沿って甲高い汽笛の音が近づいてきて、いかにも足取りを緩めるようなゆったりした雰囲気、汽車が煙を吐きながら視界に現れた。

日本語訳の最後にある「視界に現れた」は、原文では *puffed into view* となっていますが、



フランク・オコナー 短篇集
 阿部公彦訳

299
 岩波文庫

阿部公彦訳「フランク・オコナー短篇集」(岩波文庫)。フランク・オコナー(1903～66年)は短編小説の大手として知られるアイルランドの作家。

訳文では *into* という単語に含まれるニュアンスが欠落しているのがわかると思います。じつは、英語では *into* や *in* のような空間に関わる表現で、微妙な比喩やニュアンスを伝えるケースが非常に多いのです。言語によって、このような「自分と世界との関わり方」を表現する方法は著しく異なります。英語の空間表現は日本のそれとはかなり違うのです。世界は自分の上にあるのか、下にあるのか、世界を語る以前に、英語はそういった関係を重視する性質を持つようです。

日本語は、わたしの訳文からもわかるように、そういった空間表現にはあまりこだわっていません。では、日本語による表現には、どのような特性があるのか。まず、英語と比べた場合、日本語は「書き言葉」と「話し言葉」のギャップが非常に大きな言語です。このことは、たとえば日

英両国の首相の国会答弁を比較しても明らかです。イギリスのメイ首相のスピーチは、そのまま音を文字にしても、初めから書くことで相手に伝えることを目的とした文章とそれほど大きな差はありません。いっぽう、安倍首相のスピーチをそのまま文字にして文章とすることには無理があります。

これは、メイ首相の頭脳が論理的で安倍首相は非論理的ということではありません。日本語の話し言葉と書き言葉とのギャップによって生じる現象です。そして、このことを理解した上で、日本語によるオーラル・コミュニケーションを観察すると、はつきりとした特性が浮かび上がってきます。まず、英語による会話では、聞く側の人間は相手の話が終わるまで、ジッと相手の目を見ながら待っています。

これに対して日本語では、聞き手は相手の話に頻りに相槌を打つ。英語圏の人の目には、まるで「挨拶しながら会話している」ように映るでしょう。つまり、英語が「自分と世界との関わり方」を重視する言語であるのに対して、日本語は「会話の相手との関係性」を重視していると言えるでしょう。「空気が読める、読めない」

という言い方がありますが、日本人は頻りに相槌を打ったり合の手を入れながら相手の感情の変化を読み取りながら会話を進めているのです。

要するに、日本語と英語ではノリが違うのです。クロールと平泳ぎでは息継ぎの仕方がまるで異なるのと同じように、英語と日本語では、特に会話の場面では間の取り方が違います。

英語では、たとえば *Point* というふうに文を始めれば、考える間をかせげます。英語構文ならではの常套句です。これも英語特有のリズムのなかでこそ効果が生まれてくるものです。そういった前提、つまり英語と日本語が異なる「生き物」だということを見無視して日本人が英語をしゃべろうとしても難しいのは当たり前です。

日本人の英語が話せないは「聞き取れない」

また、英語は日本語に比べて「音の数が多し」という特徴があります。音の数が少ないから日本語には同音異義語が多い。そして、日本語にない音を持つ英語は日本人にとって聴き取りづらい言語ということになるのです。たとえば、

イタリア語のほうが英語より聞き取りやすいと感じる人は多いでしょう。

多くの日本人が「英語が話せない」と言いますが、そこにも誤解が含まれていると考えられます。「話せなかった」のではなく、「聞き取れなかった」ケースのほうが圧倒的に多いはずですが、こういった誤解も日本語の特性と英語との違いをしっかりと認識していないから生じるのでしょう。そして、できない理由を正確に把握しなければ、上達はあり得ない。これは、どんな勉強にも言えることだと思います。

もししゃべるトレーニングをしたければ、テストなどをするより、「日常的なこと」から英語で表現するトレーニングを重ねるべきです。簡単な表現のなかにこそ、日本語と英語の決定的な差異が浮かび上がってきます。他方で大学や仕事でつかう英語はきっちり読み書きからやる。これはテストとも比較的近い感じがよいものです。

大学入試改革によって、二〇二〇年度から英語科目で *GETEC* (英語4技能検定) や英検(実用英語技能検定)、*TOEIC* (国際コミュニケーション・イングリッシュ英語能力テスト) などの民間英語検定のスコアが合否判定の参考に取り入れられま

すが、民間の英語検定試験で問われているのは、まさに単語力です。

従来の日本の大学入試における英語は、単なる語学スキルだけでなく、より総合的な知的能力も問われるものでした。文部科学省は、そこにも問題があると考えたから英語教育や英語入試の改革を進めているのでしょう。しかし、大学の改革を進めている立場の人間としては、英語入試が語学スキルの判定だけになったら「文系の総合的知性は、どの科目で判定するのか?」という危惧も感じます。理系ならば数学が総合的知性の判定材料になる、では文系は、と……。

英語の会話では、ときに相手の *Let me finish my sentence.* (最後まで言わせてくれ) という表現に頻りに出くわします。それに対して日本語では、ときに文脈を中断することも容認される傾向が強いように思います。改革の成否も「文脈」が中断されて中途半端な形になってしまっ

構成 文II田中茂朗

あへまきひこ 英文学者、東京大学大学院教授。一九六六年、神奈川県生まれ。専攻は現代英米語。東京大学大学院修士課程修了、ケンブリッジ大学大学院博士号取得。訳書に「フランク・オコナー短篇集」(岩波文庫)、著書に「史上最大の英語政策 ウンダラケの4技能」(福音堂)、「英詩のわかり方」(英語文庫本) (共に研究社) など。